

身体障害者補助犬使用者の地域生活を推進する環境づくりに関する研究

—— 使用者が抱える「困り感」を手がかりに ——

山口 芙実*・加瀬 進**

特別ニーズ教育分野

(2013年9月13日受理)

1. 問題の所在

身体障害者補助犬法は、良質な身体障害者補助犬の育成及びこれを使用する身体障害者の施設等の利用の円滑化を図り、もって身体障害者の自立及び社会参加の促進に寄与することを目的として2002（平成14）年10月に施行された法律である。この法律の施行によりすべての公立施設及び公共交通機関、民間施設において補助犬の同伴受け入れが義務付けられ、日本で最初の障害者「アクセス法」ともいわれている。しかしながら、補助犬法の施行によって、補助犬同伴の受け入れ状況が改善されることが期待されていたものの、10年が経過した現在でも、補助犬同伴での施設利用等においてトラブルが後を絶たず、未だ交渉をしなければならぬ状況にある。補助犬が、障害者の自立と社会参加のために十分機能するには、さらなる社会的認知と理解が不可欠といえよう。

こうした状況を踏まえつつ、補助犬に関する先行研究を俯瞰すると2つの研究視点が考えられた。

1点目は補助犬ユーザーが積極的に手段（補助犬・白杖・ヘルパー・手話通訳者などの補助犬ユーザーの移動支援を指す）を選択できる環境についてである。山崎ら（2007）の論文で、人工透析を受けている盲導犬ユーザーは、通っている透析クリニックでは「機械が置いてあるため、補助犬・白杖でさえ歩くことが許されていない。なので家に盲導犬を待機させ、妻やガイドヘルパーに送り迎えをしてもらっている」と述べていた。その現状について「習慣化されて私も助かっている。」との記述があり、補助犬以外の手段も補助犬ユーザーにとっては社会参加の一つの手段として選

択されていることがわかる。また、物理的に受け入れることができない等の施設側の事情も考慮すべきなのではないかと考えられ、以上からユーザーが手段を選択できる環境の必要性が浮かび上がった。

2点目は一般社会の補助犬に対するイメージについてである。先行研究によれば、健常者は補助犬のことをなんでも完璧にできるスーパードッグととらえる傾向があり（石上2003）、補助犬への過剰な期待がある（川村2011）ことがわかった。川村（2011）の論文では、盲導犬ユーザーが「盲導犬を連れた障害者に対し『手助けする必要がない』と思っているのか、白杖の時よりも手助けしてもらう機会が少なくなった。」と述べている。こうした、一般社会の補助犬に対するイメージが、手助けしてもらえない「困り」や失敗できない「プレッシャー」など、ユーザーの地域生活における「困り感」を生み出してしまっているのではなからうか、と考えられる。

2. 目的

前述の視点から、補助犬ユーザーの地域生活における実態をヒアリングし、ユーザーが現在、地域生活を送るうえで感じている「困り感」を明らかにすることで、ユーザーにとってのより良い環境づくりの手がかりを得ることを目的とする。

3. 調査の概要

3. 1 予備調査

・調査対象者：盲導犬ユーザー W 1名

* 社会福祉法人むそう（475-0859愛知県半田市天王町1-40-5）

** 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

- ・調査内容：筆者らの問題意識と補助犬ユーザーの実態について意見を伺う。

3. 2 本調査

- ・調査対象者：補助犬ユーザー 13名(盲導犬ユーザー 5名, 介助犬ユーザー 4名, 聴導犬ユーザー 4名)
- ・調査内容：先行研究, 予備調査の結果より, 以下のように研究の【視点①】、【視点②】としてまとめ, それについての意見, 補助犬ユーザーの実態について伺う。

【視点①】

「受け入れるか, 受け入れないか」という議論より, 地域にある店舗・施設やユーザー個々の事情(お店が狭い, ヘルパーと行きたい等)を考慮するという柔軟性をもって, ユーザーが利用の際の手段を積極的に選択できる環境を作るには何が必要かという議論が必要である。

【視点②】

健常者とユーザーの認識の違いは, 健常者がユーザーを手助けする機会が減ることによる「困り感」, ユーザーや補助犬が失敗してはいけないという「プレッシャー」等を感じるにより生じる, ユーザーの地域生活における「生活のしにくさ」を生み出してしまっている。

4. 調査の結果

4. 1 予備調査の結果

筆者らの問題意識2点について伺うと, 「TPOを考えて(社会参加の)手段を選ぶことは, 健常者となら変わらない当たり前のマナーだと思う。その人が, その人らしく選択ができるということが大切。」と, ユーザーがそれぞれ自分の意思で手段を選択できることの重要性を述べている。選択が自分の意思で出来ることが大切だということがわかった。またWさんは一般社会とのイメージの違いも実感しておられたため, 本研究ではそれによって生じる「困り感」も明らかにしていった。

4. 2 本調査の結果

逐語録を作成後, 回答の内容によって分類し, それぞれにコード(論文末尾の表1:分類コードを参照)を付けた。分類分けによって, 回答の内容は大きく1:施設, 2:一般社会, 3:ユーザー, 4:補助犬, 5:スタッフ, 6:その他の6つに分類された。1:施設とは, 社会参加の際に利用する施設(飲食店や日

用品店・スーパーなどの店舗, 公共施設, 宿泊施設, 病院等)に関連するもの, 2:一般社会とは, 周囲の人々などの一般社会に関連するもの, 3:ユーザーとは, 個々の考えや補助犬に対する思いなどのユーザー自身に関連するもの, 4:補助犬とは, 補助犬の役割や訓練など補助犬に関連するもの, 5:スタッフとは, インタビュー調査に同席していただいたスタッフの回答, 6:その他とは, 調査には関係のない回答, 質問等である。主な回答を以下にまとめた。

4. 2. 1 施設

同伴可能であった施設に, 医療機関を挙げる回答者が8名みられた。一方で同伴拒否をした施設にも, 4名が医療機関を挙げており, 医療機関への要望としては, 3名が受け入れ範囲・許容範囲の確認と検討をしてほしいとの回答をしていた。同じ医療機関でも受け入れ範囲が施設によって異なり, 本当はどこまで受け入れ可能なかを確認することが求められている。

同伴拒否をした施設で一番多く挙げられたのは飲食店であり(6名), 2名のみが交渉後に同伴可能だと挙げていたため, 交渉なしに同伴可能である飲食店は多くないと思われる。拒否の理由は, 犬は困る, 犬が苦手な人がいたら困る, 料理に毛が入る等であった。しかしながら最近では, 最初は断るが, 話をすると受け入れてもらえると6名が回答していたことより, 受け入れ施設が増加傾向にあることが推測された。

4. 2. 2 一般社会

ユーザーの回答の中には, 一般社会が持つと思われる補助犬に対するイメージは, 「野性的な犬」, 「スーパードッグ」, 「かわいそうな犬」が挙げられた。イメージから生じる「困り感」としては, 盲導犬は, 衛生面で断られることが多い(1名), 「暑い中(雨の中)連れ出されてかわいそう」と(冷たい態度で)言われる(3名), 「スーパードッグ」と思われていることで必要な手助けを受けられない(2名)という回答が挙げられた。こうしたイメージを持つ人に対し, 直接話をして理解してもらうことの重要性が述べられていた。

周囲の人たちとの関わりが減ったと回答したユーザーは1名のみで, 声を掛けてもらうことが増えたと回答したユーザーは8名であり, 補助犬といると周囲との関わりが増えたというユーザーが圧倒的に多かった。援助依頼がしやすくなったとの回答も5名みられ, 補助犬の社会的効果が明らかとなった。

4. 2. 3 ユーザー

同伴拒否に対しある盲導犬ユーザーは、「常識で考えて理屈が通り、偏見や差別的な意識がなければ、拒否があってもいい。」と話しており、理由次第では同伴拒否にも納得ができるユーザーもいることがわかった。拒否に対してユーザーが納得するには、まずは拒否の理由について施設側から説明があるかどうかが重要であると考えられた。

補助犬以外の手段を選択するという考えに対し賛成であると回答したユーザーは5名、反対であると回答したユーザーは8名であった。反対の中でも、選択はユーザーそれぞれの考え方だという回答がみられ、手段の選択は個々の考えによることが大きいと考えられる。しかしながら賛成派・反対派の共通の意見として、自分の都合よりも、社会の受け入れがどうかということが選択基準になっていると3名が回答しており、ユーザーの意思で手段を選択することができない現状が明らかとなった。

5. 考察

5. 1 考察の視点の修正と追加

結果を整理していく中で、本調査に入る時点で設定していた考察の視点を修正・追加する必要性があったため、以下の新しい【視点①】～【視点③】を設定し、考察する。

【視点①】

「受け入れるか、受け入れないか」という二者択一の議論よりも、補助犬を受け入れるためにはどうしたらよいかという柔軟性のある議論をするためには、施設の意向やユーザーの意思を踏まえた上で、ユーザーが社会参加の手段を積極的に選択できるような環境をつくる必要があるのではないか。その手がかりとはどのようなものか明らかにする。

【視点②】

一般社会が持つ補助犬に対するイメージの違いは、健常者がユーザーへ手助けする機会を減らす、失敗してはいけないという「プレッシャー」を与える等の、ユーザーの「困り感」を生み出しているのではないか。

【視点③】

ユーザーの地域生活、社会参加の中で生じる、困り感（視点①②に当てはまらないもの）はどのようなものか。ユーザーにとってのより良い環境づくりのための手がかりとは。

5. 2 【視点①】からの考察

5. 2. 1 施設側の意向

同伴可能・不可能がどちらも多かった医療機関を例に考えると、現状としては同伴可能・不可の範囲が施設によって異なることが明らかとなった。理由次第では、拒否に対して納得できると話しているユーザーもいるため、ユーザーは同伴拒否に対してただ受け入れを主張しているのではなく、施設側からの説明や相談を求めているのではないだろうか。

5. 2. 2 ユーザーの意思

補助犬か、補助犬以外の手段かを選択するのは個々の考え次第であるが、その個々の選択基準が施設側の受け入れ次第となっているため、ユーザーの意思で手段を選択することができないという現状が明らかとなった。施設入口での受け入れが可能であるという前提となって初めて、ユーザーは施設利用を目的とした時の手段の選択を自身の意思でできると思われる。

5. 2. 3 ユーザーが手段を積極的に選べる環境

施設への受け入れが前提となれば、施設の事情で施設内に同伴できない場所があったとしてもユーザーにとっては選択肢が広がり、最も良い方法を選択することができるようになる。施設の受け入れがという理由ではなく、ユーザーが目的とする場所ではどのような手段が適切かを、施設側の意向も含めてユーザーが判断できることが、ユーザーの意思で積極的に選択できるという環境ではないだろうか。

5. 3 【視点②】からの考察

5. 3. 1 一般社会が持つイメージ

調査結果より、イメージから生じる様々なユーザーの「困り感」が明らかとなった。これらの一般社会が持つイメージは、報道や訓練の様子から影響を受けていると考えられ、それらの内容や啓発内容の検討をしていく必要性が今後も求められる。日本の犬文化もイメージ形成に大きな影響を与えているが、近年では室内犬や、猫カフェやドッグカフェ等の飲食店も増えているため、日本人が持つ“犬”のイメージが変わりつつあるように思われる。

5. 3. 2 一般社会との関わり

補助犬というと声を掛けてくれるが増えたとの回答が多くあったことから、補助犬を受け入れる社会へと変化しつつあることが推測される。補助犬の存在

は、周囲からユーザーへ声を掛けやすくするだけでなく、ユーザーが障害者であることの目印となり、援助依頼がしやすくなるという効果もあることが明らかとなった。

5. 4 【視点③】からの考察

犬アレルギー等のトラブルを防ぐためには、施設側は職員とお客さんへの周知、犬が苦手な方は補助犬への理解と自己申告、そしてユーザーは犬アレルギーの方の生理的・精神的負担の理解と、それぞれの協力が不可欠であり、施設側が中心となって対応することが求められているが、現状としては受け入れたことがないという施設がほとんどであるため、積極的に対応できる施設は少ない。しかし、1回受け入れた施設は2回目以降受け入れ続けていることが明らかとなった。

6. まとめと今後の課題

ユーザーが自分の意思で積極的に手段を選ぶことができる社会になるには、受け入れが前提である社会でなければならないことが明らかとなった。

受け入れが前提である社会を作っていくためには、施設側の特に“最初の受け入れ”に対する壁を少しでも減らしていくことが今後の課題となる。特に犬アレルギーや犬嫌いの人に対する対応は、施設側が中心となって対応することが求められているが、そのように積極的に対応できる施設はまだ少ない。実際に受け入れている施設を対象とした、“最初の受け入れ”の際にどのようなサポートが必要だと感じたか、受け入れる前後で補助犬に対するイメージの変化があったかなどの調査や、それをもとにした受け入れに不安を抱える施設向けの具体的な資料の作成、その資料の有効性の検証などが今後の課題となると考えられる。

また、施設側が自分たちの意向をしっかりと持ち、それをユーザーに伝えることが重要であると考えられ、ユーザーもその意向を受け止め、どちらかが一方的でも成り立たない“対話”ができる環境において手段を選択できることが、本当のユーザーの意思での選択となるのではないだろうか。

今回は、ユーザー対象の調査であったため、回答はユーザーの経験談に限られた。“犬がいると困る”人を対象とした補助犬の認識調査をすることで、そのような人も含めて補助犬を受け入れることのできる環境づくりの手掛かりが得られ、施設側の対応方法の参考となることが考えられる。

受け入れに対して施設側との“対話”が重要であると先述したが、一般の人との“対話”も重視すべきであると考えられる。ユーザーとの直接的な関わりによる実体験に基づいていけば、一般の人にとっては一番理解しやすく、印象に残るものとなるのではないだろうか。しかし、街中で補助犬に出会う機会は少ないため、社会福祉協議会のボランティア等地域活動を活用し、地域の子どもそしてその親との繋がりを作ることによって、障害者理解・補助犬理解へとつなげていくことが出来るのではないだろうか。そのような補助犬の普及・障害者の理解へ向けた地域に根差した活動の実践、実践状況の研究、そしてそれが地域へもたらす効果の検証が求められる。

また補助犬の存在は、周囲とユーザーを結びつけ、必要な援助を受けやすくするという社会的効果があるということも明らかとなった。施設側、周囲の人、ともに“対話”ができることが重要と述べたが、補助犬の存在自体が“対話”をスムーズにしていることが考えられる。今後も、補助犬をきっかけとして、多くの人と補助犬ユーザーが関わり、ユーザーの社会参加が促進されることが望まれる。

表 1 分類コード

No.	分類コード1	No.	分類コード2	No.	分類コード3		
1	施設	1	施設側の対応	1	同伴可能 交渉後同伴可能 途中まで同伴可能		
				2	同伴拒否		
		2	交渉	1	交渉の方法	事前に電話	
						資料・情報提供	
						指導	
						交渉に値する施設かどうか	
		2	ユーザーの交渉に対する思い	積極的			
				負担感、難しさ			
		3	施設側へ求める対応	1	受け入れに関する知識を持つ	2	受け入れ・許容範囲の確認と検討
						1	同伴拒否に対して
		4	施設側の対応への批判	1	同伴拒否に対して	2	施設内での対応に対して

2	一般社会	1	一般社会が持つイメージ	1	“野性的な犬”のイメージ		
				2	“スーパードッグ”のイメージ		
				3	“かわいそうな犬”のイメージ		
				4	犬文化	日本 欧米	
				5	社会が持つイメージに対して		
		2	一般社会への要望	1	補助犬の能力・仕事を知る		
				2	関わり方を知る		
				3	積極的な声掛け		
				4	当たり前を受け入れられる		
		3	一般社会の反応	1	関わりが増えた	励みになる関わり 困る関わり	
				2	関わりが減った, 批判的な態度		
				3	関わりはしないが, 注目している		
		4	啓発活動	1	ユーザーによる活動		
				2	啓発のポイント		
		5	報道・ネット	1	好影響		
2	社会へ誤解を与える報道						
3	ユーザーが求める報道内容						
3	ユーザー	1	補助犬以外の手段を選択	1	賛成	状況によって ユーザーの意思で手段を選択できない 現状	
				2	反対	補助犬が最優先 行先によっては同伴できない現状	
				3	それぞれの考え方がある		
		2	困り感	1	補助犬の管理		
				2	外出のしにくさ		
				3	補助犬を持たない障害者からの批判		
				4	実働数の少なさから		
		3	ユーザーの責任	1	補助犬の管理		
				2	失敗後の対応		
				3	権利と義務について		
				4	他ユーザーに対する批判		
		4	援助依頼	1	援助依頼のしやすさ		
2	援助依頼のしにくさ						
5	補助犬との関係	6	ひとりひとりの違い	1	考え方, 性格の違い		
				2	ライフスタイル, 自立度の違い		
				3	各障害について	視覚障害者の移動支援について 聴覚障害者とのコミュニケーションの 難しさ 介助犬使用者の補助犬管理の難しさ	
				4	補助犬の普及		
				5	補助犬の普及		
4	補助犬	1	補助犬の普及状況	1	地方都市の差		
				2	補助犬法の認知		
				3	補助犬の普及	盲導犬の普及 介助犬の普及 聴導犬の普及	
		2	補助犬の役割・仕事	1	盲導犬		
				2	介助犬		
				3	聴導犬		
		3	補助犬の実際	1	家での姿		
				2	性格の違い		
		4	協会・訓練	1	訓練内容, 協会の方針, 犬の適正		
				2	資格の取り方		
		5	スタッフ				
		6	その他	1	質問		
2	なし						
3	失踪事件に対して						
4	補助犬を持つに至る経緯						
5	パピーホーム						

7. 文献

7. 1 身体障害者補助犬の社会的認知に関する先行研究

- 上原 紀美子 (2011) 西鉄久留米駅周辺商業施設における調査からみた身体障害者補助犬の同伴受け入れ状況と今後の課題, 久留米大学文学部紀要, 社会福祉学科編, 10, 59-67.
- 川村 隆子, 浜谷 英博, 花豊 真希子 (2011) 地域社会における補助犬の地位および社会的意識に関する研究調査, 三重中京大学地域社会研究所報, 23, 211-225.
- 三浦 靖史, 岡田 奈々, 近澤 知乃 (2010) 医療機関における補助犬受け入れの現状と課題, 日本補助犬科学研究, 4 (1), 31-37.
- 新島 典子 (2010) 身体障害者補助犬に関する社会意識-動物看護学生を対象に, 日本補助犬科学研究, 4 (1), 11-16.
- 山川 伊津子 (2009) 身体障害者補助犬の社会的受け入れ, ヤマザキ動物看護短期大学雑誌, 1, 171-176.
- 松中 久美子, 甲田 菜穂子 (2008) 一般成人の身体障害者補助犬法の周知と補助犬の受け入れ: 補助犬関連知識の効果, 社会福祉学, 49 (3), 53-59.
- 高柳 友子, 福所 秋雄, 清水 和行 (2008) 第2回 日本身体障害者補助犬学会学術大会シンポジウム/補助犬と人, そして職場-身体障害者補助犬の受け入れ, 日本補助犬科学研究, 2 (1), 9-16.
- 榎原 いづみ (2008) 身体障害者補助犬の現状と社会的認知-高校生に対するアンケート調査から, コミュニティ, 11, 83-96.
- 山崎 恵子, 高柳 友子, 竹前 栄治 (2007) シンポジウム日本身体障害者補助犬学会第1回学術大会シンポジウム/透析施設における盲導犬の受け入れ, 日本補助犬科学研究, 1 (1), 11-23.
- 国土交通省住宅局住宅総合整備課 (2007) 身体障害者補助犬を知っていますか? 住宅56 (9), 50-54.
- 水野 映子 (2004) WATCHING 身体障害者補助犬への理解促進に向けて, ライフデザインレポート, 27-29.

7. 2 身体障害者補助犬利用者の声

- 川津 亜紀 (2007) 介助犬シェリーと共に, リハビリテーション, 496, 12-15.
- 上原 麻奈未 (2007) 聴導犬と出会ってから, リハビリテーション, 496, 16-21.
- 佐藤 憲 (2007) 五人目のアイフレンド, リハビリテーション, 496, 22-24.
- 塩屋 隆男 (2007) 50年の歴史をもとに, リハビリテーション, 497, 22-24.

- 直居 鉄 (2003) アイメイト・ファインと共に, リハビリテーション, 455, 12-16.
- 岸本 宗也 (2003) わが家の二番目の娘, リハビリテーション 鉄道身障者福祉協会, 455, 17-21.
- 吉原 学 (2003) 歩こうよ フェネル!, リハビリテーション, 455, 22-25.
- 木村 佳友 (2003) 介助犬と共に暮らす, リハビリテーション, 455, 26-30.
- 小山 恵美子 (2003) アイメイトがくれた出会い, リハビリテーション, 456, 8-11.
- 佐藤 江利子 (2003) 介助犬を支える者として, リハビリテーション, 456, 12-16.
- 阿部 貞信 (2003) ジャム グッド グッド, リハビリテーション, 456, 17-21.
- 塩屋 賢一 (2003) アイメイトと生きる, リハビリテーション, 457, 17-21.
- 木村 佳友 (2003) 介助犬と生活して, ノーマライゼーション, 23 (5), 32-35.
- 清水 和行 (2003) 盲導犬と歩くこと, ノーマライゼーション, 23 (5), 29-31.
- 清水 和行 (2003) 盲導犬と私, ノーマライゼーション, 25 (5), 10-11.
- 松本 江理 (2003) 聴導犬に求めること, ノーマライゼーション, 25 (5), 12-13.
- 木村 佳友 (2003) ペットから介助犬へ, ノーマライゼーション, 25 (5), 14-15.
- 川本 昌代 (2003) 介助犬に求めたこと, ノーマライゼーション, 25 (5), 16-17.

7. 3 その他

- 石上智美 (2003) 社会における補助犬理解の現状と課題, リハビリテーション, 457, 8-11.
- 事業者における補助犬受け入れマニュアル作成委員会編 (2009) 『補助犬受け入れマニュアル<事業者編> 補助犬同伴のお客様への対応 盲導犬/聴導犬/介助犬』, 特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー
- 医療機関における補助犬受け入れマニュアル作成委員会編 (2004) 『盲導犬/聴導犬/介助犬 身体障害者補助犬同伴受け入れマニュアル<医療機関編>』, 特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー
- 身体障害者補助犬受け入れ等相談対応マニュアル作成委員会編 (2008) 『身体障害者補助犬受け入れ等相談対応マニュアル』, 特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー
- 補助犬同伴受け入れマニュアル作成委員会編 (2004) 『よくわかる補助犬同伴受け入れマニュアル』, 中央法規

身体障害者補助犬使用者の地域生活を推進する環境づくりに関する研究

—— 使用者が抱える「困り感」を手がかりに ——

A Study of Creating an Environment to Promote the Community Life for Users of the Disabled Assistance Dogs

—— Focusing the Sense of Troubled among Such Users ——

山口 芙実*・加瀬 進**

Fumi YAMAGUCHI and Susumu KASE

特別ニーズ教育分野

Abstract

The purpose of our study was to clarify the issues to be overcome for the purpose of creating more better environment to promote community life of users of the disabled assistance dogs. So we have set the point of view of the following three and conducted a survey and interviews to 13 users.

No.1 : It is required that we create an environment that allows such users to actively select the means of social participation

No.2 : The image of the disabled assistance dogs among the public create such a sense of troubled as reducing the chance of non-disabled person is to help users of the disabled assistance dogs and/or giving pressure to users of the disabled assistance dog that they must not fail, etc.

No.3 : What the sense of troubled does they have in addition to the above

We found the following as a result. Social ideal must allow all users of the disabled assistance dogs to choose the means actively in making their own. In order to achieve such a society, it is necessary to create an environment promoting the acceptance of disabled assistance dog is premised

Key words: the Disabled Assistance Dogs, Community Life, the Sense of Troubled

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、身体障害者補助犬使用者の地域生活を推進する環境作りにおいて、克服すべき課題を明らかにすることにある。そこで、次の3つの視点から身体障害者補助犬使用者13名（盲導犬ユーザー5名、介助犬ユーザー4名、聴導犬ユーザー4名）インタビュー調査を行った。

【視点①】 ユーザーが社会参加の手段を積極的に選択できるような環境をつくる必要がある。

【視点②】 一般の人々が持つ補助犬に対するイメージは、健常者がユーザーへ手助けする機会を減らす、身体障害者補助犬使用者に失敗してはいけないという「プレッシャー」を与える等の、ユーザーの「困り感」を生

* Social welfare corporation "MUSOU" (1-40-5 Tennou-cho, Handa-shi, Aichi 475-0859, Japan)

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

み出している。

【視点③】 上記以外にどのような困り感があるか。

結果として、ユーザーが自分の意思で積極的に手段を選ぶことができる社会を創るには、身体障害者補助犬の受け入れが前提となる環境作りを推進しなくてはならないことが明らかとなった。

キーワード: 身体障害者補助犬, 地域生活, 困り感